



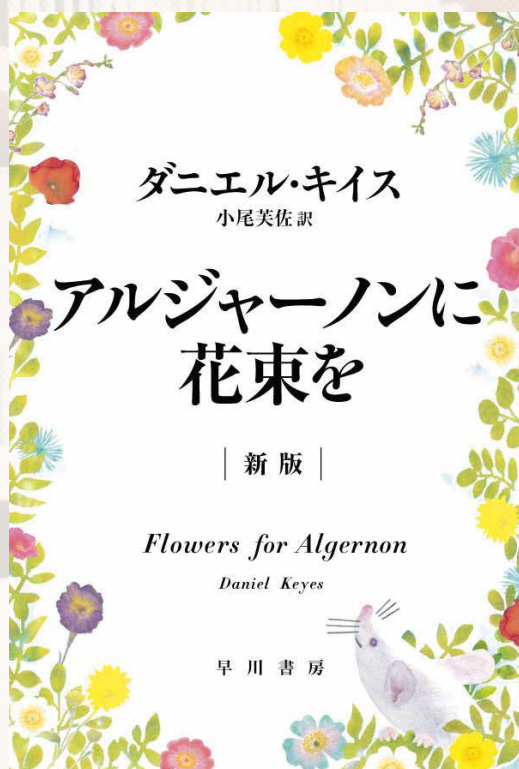
おすすめの一冊

ダニエル・キイス『アルジャーノンに花束を』

フ エニルケトン尿症（PKU）は、

知的発達障害を主徴とする遺伝性疾患ですが、早期治療が有効なため、日本でも1977年からPKUの新生児スクリーニングが行われるようになり、多くのPKUの方々が既に健康に成人しています。筆者は長年、PKUスクリーニングに関わっておりますので、PKUを題材としたダニエル・キイスの著書、『アルジャーノンに花束を』を紹介させていただきます。

主人公であるチャーリー・ゴードンはIQ 68と、発達遅滞を伴う32歳のPKUの青年です。彼は、「脳手術による知能改善」を研究課題とし、既にネズミを用いた脳手術に成功している2人の研究者に選ばれて、知能改善手術を受けます。術後数週間で、彼のIQは185にまで上昇し、数十カ国語をマスターし、自然科学、人文科学に通暁する天才に変化します。また、この手術で利口になったネズミ、アルジャーノンとの交流が続けますが、数カ月



アルジャーノンに花束を [新版]
ダニエル・キイス 著
小尾美佐 訳
ハヤカワ文庫NV

後、アルジャーノンに退行現象が出現して死に、天才となったチャーリーは、このことから自己の知的退行を予測してしまいます。彼は、最終的に障害者施設に入所することになりますが、その経過が、チャーリーの日記として記述されており、日本語訳でも（筆者はもちろん日本語訳しか読んでいないのですが……）、知的レベルの変化に伴う彼の日記の記述の変化が、大変見事で

あることに感心しました。そして手術前の知能にまで退行したチャーリーが、障害者施設に入所する折に、それまで関わりを持ってきた教師と学者たちに宛てた手紙の追伸に、「ついでに、どこかついてあげたらうらにわのアルジャーノンのおはかに花束をそなえてやってください」と書き記します。この箇所に、読者は心からの感動を覚えるのではないのでしょうか。

ダニエル・キイスは、『アルジャーノンに花束を』の中編を1959年に、長編は1966年に上梓しておりますが、医学的な立場からは、それより数年前の1953年、BokorがPKU治療についての論文を報告し、今日では、PKUは治療可能な先天性代謝異常症であると理解されております。しかし、このような希少疾患の医学的な記述はさて置き、本書は現在まで、PKUを題材とした文学の古典として世界中で読み継がれています。また、本書と筆者の出会い、早川書房から本書が文庫版として刊行された1999年以後なのですが、長年PKUと接してきた小児科医の筆者は、PKU治療の評価に際して、「IQなる物差し」のみを用いるのでは不十分であることを、改めて本書『アルジャーノンに花束を』から学びました。健康に成人した20人を超える私のPKUの元子どもたちにも、本書をぜひ読んでほしいと思っております。

大和田 操

おおわだ みさを
本会学術委員

1963年 立教大学理学部化学科卒業。1967年 東京慈恵会医科大学医学専門課程卒業。日本小児科学会専門医、日本糖尿病学会専門医、代謝異常児等特殊ミルク供給事業安全開発委員会・委員。